

興福寺承仕関係文書から

はじめに 歴史研究室では、興福寺の承仕を世襲した中村家の分家に伝來した文書を、科研費も充当して調査している。そのうち東大寺図書館に寄贈された分は、すでに吉川聰編『東大寺図書館所蔵中村純一寄贈文書調査報告書』(2014年。以下『報告書』と略称)として公表した。しかしそれ以外に、今も中村泰氏が所蔵する史料が存在しており、その分を現在調査している。調査で見いだした興味深い史料の一部をここに紹介したい。

承 仕 中村家が世襲した承仕とは、正式には「唯識講承仕」という(例えば『報告書』海原靖子論文20頁所収の安政2年2月仲ヶ間横入連判書)。つまり興福寺の承仕とは、唯識講の役職名だった。唯識講とは、平安時代院政期に藤原忠実が創出した、興福寺で唯識を勉学する講である。その僧侶集団は中世には唯識講衆・講衆と呼ばれ、興福寺の主流派の僧侶集団を形成していた(坂井孝一「三ヶ大犯」考『日本歴史』第496号、1989年)。承仕は、本来はその講衆の活動を支える実務を担当する職だったはずである。そして江戸時代にも、承仕は唐院・新坊の公物方を管理するなど、興福寺運営のカナメを担っていた。

承仕中過去帳 その承仕に関する史料として、今回、中村泰氏所蔵文書で第1括1号とした史料を紹介したい。これは「承仕中過去帳」の外題を持ち、縦11.8cm横16.9cmの、小さな袋綴装の冊子本である。奥書には「文政元戊寅歳五月／中村栄閑／写之」とあり、江戸時代後期の文政元年(1818)の写本である。表紙見返しには次に掲げるように、本文の目次が掲載されている。

一、天文二年以来承仕中臘次 写／二、同過去帳 写／三、同系図書 写／四、唐院新坊修理方役次第／五、弥勒講牛王裏書品々 写／并、福智家記録

この目次の中で「一」・「三」は、『報告書』宇佐美倫太郎論文所収の、「天文二年以来承仕中系図并臘次書」(以下、「臘次書」と略称)と同じ内容である。「四」は承仕の役である唐院奉行・新坊奉行・修理奉行を書き上げたもので、江戸時代には唐院奉行・新坊奉行が各2名ずつ、修理奉行が2名~4名だったことが判明する。

承仕仲間の起請文 今回紹介するのは、目次の「五」にあたる部分である。室町時代後期から江戸時代前期に

(11) 今度本式溜洲会御執行付、自然如何様
之雖出入在之、各一味被同心可申、若
此儀ニ背相輩於在之者、當社春日大明
神之可蒙御罰者也、仍固狀如件
寛永十五戊丑十二月十一日

琳円堯円顕琳淨顕淨賢円
善善顕乘良円宗乘慶果信

かけて、承仕が誓いを立てた起請文の写しである。11通あり、それぞれの先頭に①~⑪の番号を付けておいた。⑤のみは「臘次書」にも掲載されるが、他は新出史料である。正文は「仲ヶ間一臘箱」にあったとのことで、承仕仲間で代々引き継がれた重要文書である。

文書は年代順に並んでいる。最古の①天文3年(1534)の文書は、福田院(福寺ともいう)の地が質物になったことについて、淨順房の責任を問うている。淨順は「蓮成院記録」によれば、天文2年9月20日に「不経歴」を問われて、唐院承仕の2名と共に改易されている。彼の改易によって登用されたのが祐賢で、祐賢は中村家の初代として系図に見える人物である(『報告書』宇佐美論文25頁)。また、本史料の「一」や「臘次書」では承仕の「天文二年以来」の臘次を記録している。この時期に何が変わったのか、さらなる検討が必要である。

天文年間の他の文書では、承仕の会合などの雑談を外で噂にすることを戒めたり(②)、荘園の算田師の競争を調整したり(③)、寺恩の下行がないことに対応したり(④)と、承仕仲間が戦乱の中で苦労しながらも、団結を保とうとする様子が窺える。また、⑤⑥では承仕の昇進の順番を定めるが、これは江戸時代後期まで規範として守られていた(『報告書』20頁)。

その後、奈良の支配者は松永久秀、さらに筒井順慶に移る。筒井順慶は天正12年(1584)8月11日に亡くなるが、7月に承仕が病の回復を祈ったのが⑦である。翌年には、閏8月に筒井家は伊賀に転封となり、9月に豊臣秀吉の異母弟の秀長が大和に入ってくる。⑧ではその際に、興福寺領が安堵されんことを願っている。しかし結果は大幅削減となり、興福寺は大打撃を受けている。⑨⑩で給分等の下行がなく迷惑と記すのは、そのような事情のためだろうか。寺の衆徒だった筒井順慶との近しさと、その後の苦労が読み取れる。

おわりに 中世から近世へと変化する時代に、承仕たちは互いの利害を調整しながら、一体感を持った集団を維持していた。ただし本史料は誤写もあり、意味が取りにくいので、今後さらに理解を深めたい。(吉川聰)

